

〈論文〉

大学生における戯曲読解に関する調査研究と提言

石本興司 川南 恵

1. はじめに

現代の演劇創作では、「戯曲を読解する」と「演じる」ことは不可分の関係にある。すなわち、演じるためには戯曲形式の文章の読み解きができなければならない。したがって、俳優養成において戯曲が読解できるようになることは重要な目標のひとつであり、大阪芸術大学舞台芸術学科演技演出コースにおいても、それを学習目標のひとつとしている。しかし、当コースで演技を学ぶ学生のほとんどが戯曲読解に困難を感じ続けている。そして、この問題の原因が明らかにされていないため、演技を学ぶ(教える)際の障害となっている。なぜ、学生は戯曲読解ができないのであろうか。

演劇の実技教育をおこなっている実践系大学、専門学校、劇団付属の養成所といった俳優養成機関においては、「演じることを学ぶ(教える)」は教育の眼目であろう。しかし、戯曲読解の指導法に関しては、教育機関はもとより⁽¹⁾プロフェッショナルな現場においても多くは言及されてこなかった。よって、先行する調査や研究も筆者らの知りうる限りにおいて存在はしていない。

本論文はこの未開拓な分野に光を当てるべく、学生を対象に戯曲読解の実態を調査・考察し、戯曲読解を困難にしている原因を探り、その指導案を提言するものである。

本論文では、まず、大阪芸術大学舞台芸術学科演技演出コース(以下、演技演出コース)の学生に対して2017年1月に実施した「戯曲読解」に関する質問紙調査と、同年4月に日本語能力の検定試験を用いた「日本語力」に関する調査について述べる。この2つの調査結果から「戯曲読解」が困難である原因についての考察を行い、「戯曲読解」の力を向上させ

る「日本語力」と「読解方略」の指導に関する提言を行うこととする。尚、本稿のことを「本論文」、本稿執筆のために実施した調査研究のことを「本研究」と呼称する。

2. 「戯曲読解」に関する質問紙調査

2.1. 調査概要

学生の戯曲読解に関する質問紙調査(以下、戯曲読解アンケート)は、2016年度後期(2017年1月)に演技演出コースの1回生～4回生を対象に実施した調査である。このような戯曲読解に関するアンケート調査は、筆者らの知る限りでは演技演出コース創設以来初の実態調査である。

2.1.1. 調査目的・対象・方法

調査の目的は、演技演出コースの学生の戯曲読解に関する見解を探ることである。調査対象は、アンケート調査日に出席した2016年度時点での1回生38名、2回生29名、3回生41名、4回生25名の合計133名である。調査方法は、各学年のクラス別の授業時間内に、配布した質問紙について教示し、20分間で記述をさせた。

2.1.2. 質問紙内容

質問紙は3つの設問で構成した。設問Q1は「『戯曲読解』について、自分に問題や課題があると感じていますか?」に対して、「とても感じている」「少し感じている」「感じていない」の3項目より1項目を選択して回答する。設問Q2は「『戯曲を読解できている状態』とは、どのようなことだと考えますか?」に

対して、自分の考えを記述して回答する。設問Q3は「(あなた、あるいは他の誰かが)『戯曲が読解できない』のは、なぜだと考えますか?」に対して、自分の考えを記述して回答する。

2.2. 調査結果

1回生から4回生の全学年のほとんどの学生が、自分は戯曲読解に問題や課題があり、戯曲読解に困難を感じ続けていると回答した。

3. 「日本語力」に関する調査

3.1. 調査概要

2017年1月に実施した戯曲読解アンケートの回答では、誤字脱字、文法的な誤り、書き方そのものに未熟な文章が数多く見られた。さらに、設問の意図を十分にくみ取れていない回答も少なくなかった。そこで、学生の「日本語」の様相を検討するため、学生の日本語力に関する調査(以下、日本語力調査)を実施した。調査には、日本語を母国語としない人の日本語能力を測定し認定する日本語能力試験JLPT⁽²⁾のN1設問の一部を利用した。日本語能力試験は、言語知識である「文字・語彙」「文法」と、言語知識を活用しての課題遂行の「読解」「聴解」の2観点4要素から構成されている。また、N1からN5までのレベルがあり、N1は「幅広い場面で使われる日本語を理解できる」レベルとされている。今回の調査では「聴解」をのぞく3つの要素で構成されたN1レベルから13問⁽³⁾を使用した。

3.1.1. 調査目的・対象・方法

調査の目的は、学生の戯曲読解を困難にさせている原因と学生の日本語力との関連を探ることである。調査対象は、年度が変わった2017年度4月に演技演出コースに入学した新1回生53名、進級した新2回生40名、新3回生27名、新4回生35名の合計155名である。尚、戯曲読解アンケートの実施は2016年度1月であったため、その時点での4回生はすでに

卒業しており、今回の日本語力調査には含まれない。また、1回生から3回生までもそれぞれ進級して学年が変わっている。よって、この日本語力調査では、戯曲読解アンケート時点の1回生は新2回生、2回生は新3回生、3回生は新4回生とし、新しく入学した新生を新1回生とそれぞれの学年に「新」と加えて呼称する。調査方法は、各学年のクラス別の授業時間内に、配布した質問紙について教示し、30分間で記述をさせた。

3.1.2. 調査内容

今回利用した設問は、日本語能力試験N1の設問から13問を選んで構成したものである。まず、要素1「文字・語彙」の設問がQ1. 漢字読み、Q2. 文脈規定、Q3. 言い換え類義、Q4. 用法(出題語と文)である。次に、要素2「文法」の設問がQ5. 文法形式の判断、Q6. 文の組み立て、Q7. 文章の文法(文脈理解)である。最後に、要素3「読解」の設問がQ8. 内容理解(短文)、Q9. 内容理解(中文・理由理解)、Q10. 内容理解(長文・概要理解)、Q11. 総合理解(複数文の比較・統合の理解)、Q12. 主張理解(長文)、Q13. 情報検索(比較検討、必要情報の抽出)である。

3.2. 調査結果

調査結果は、誤答者数の多い順にQ4. 用法、Q13. 情報検索、Q11. 総合理解、Q7. 文章の文法、Q8. 内容理解、Q12. 主張理解の6問であった。また、4学年に共通の誤答傾向が見られた。

4. 考察

4.1. 「戯曲読解」の定義

「戯曲読解」とは、単に戯曲を読んで理解することではない。なぜなら、戯曲は「劇文学」であると同時に、上演されることを想定して書かれた「上演台本」でもあるからだ。「劇文学」としての戯曲においては、通常読解と同様、内容を正確に

理解することを目指した読み方が肝要である。一方、「上演台本」としての戯曲においては、演技や演出をするために有効な読み方をしなければならない。そして、そのような読み方を行うためには、内容を正確に理解する読み方が前提となるし、演技や演出において有効な読み方となっていることを確かめるためには、実際に演技や演出を行う以外にないであろう。つまり、「上演台本」としての戯曲を読解できるということは、正確に内容を理解しつつ、演技や演出にとって有効な材料を抽出し、供給できることであると言える。

本研究を端緒にして、筆者らが目指しているのは、演技や演出についてどのように教育するかという点にある。したがって、戯曲を「上演台本」として捉え、その上で「戯曲読解」について検討することが必要であると考え。そこで、本論文における「戯曲読解」とは、「①正確に内容を理解し、②演技や演出のための材料を抽出し、③演技や演出をする、という作業過程のこと」と定義する。

4.2. 「戯曲読解」が困難である原因

4.2.1. 「困難を感じ続けている」

本研究では、まず、戯曲読解アンケートを実施した。それ

により、調査対象者の9割以上が「戯曲読解」について何らかの困難があると感じており、学年別においては、1回生では94.7%、2回生では100%、3回生では97.6%、4回生では76.0%が困難を感じているという結果を得た(図1)。

4回生が他に比べて割合が低いのは、調査を実施したのが卒業制作公演の約3ヶ月後という比較的直後であったことが関係していると思われる。卒業制作公演では、それまでの公演実習⁽⁴⁾とは異なり、学生自らが公演のための戯曲を選択し、演劇作品創造の大部分を担うことをする。そのため、演技や演出の作業への各自の責任はそれまでよりも大きいものに感じられたであろうし、同時にそれらの作業における充実感や達成感もより大きかったはずである。結果、調査時点では「戯曲読解」についての問題意識が低減した者がいたのではないかと推測する。

しかしながら、それでもなお、4回生の4分の3以上が困難を感じていると回答している。そして、1回生から3回生においては、困難を感じている者とそうではない者との割合に差が見られない。つまり、学習期間が長くなるほど困難を感じる者の割合が減少するという状況ではないのであり、全体としては「困難を感じ続けている」と言えるのではないか。

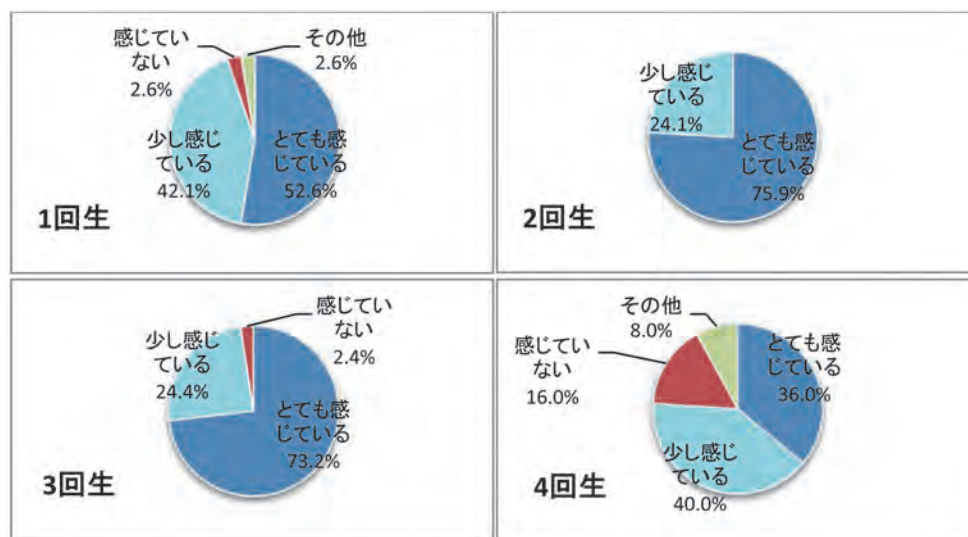


図1 戯曲読解アンケートQ1「戯曲読解に問題や課題を感じていますか?」学年別の回答比較

4.2.2. 読解方略

読解を促進する読み方のことを一般的に「読解方略」と言う。犬塚 (2002;2013) ⁽⁵⁾ は、この読解方略に関して、多様な方略の相関関係について検討し、全体的な構造を明らかにし、3つの方略因子とその下位に7つの方略カテゴリを想定している(表1)。

表1 読解方略の構造(犬塚, 2013 Table1)

方略因子	方略カテゴリー	方略例
理解補償方略	意味明確化	難しい文は、自分のことばでかみ砕いて言い直しながら読む
	コントロール	分からないところはゆっくりと読む
内容理解方略	要点把握	大切なところに線を引く、コメントや内容をまとめたものを書き込む
	記憶	難しいことばや内容は理解しないで丸暗記してしまう
	質問生成	自分がどのくらい分かっているかをチェックするような質問を自分にながら読む
理解深化方略	構造注目	接続詞(しかし、そして、つまり、などのことば)に注目しながら読む
	既有知識活用	既に知っていることと読んでいる内容を結び付けようとしながら読む

犬塚 (2013) によれば、3つの方略因子のうち、「理解補償方略」は「最も表面的・部分的な因子」であり、「内容理解方略」は「文章に明示された内容の表象構築にかかわる因子」であり、「理解深化方略」は「文章に明示されていないところに注意を向けるもの」として位置づけられている。「理解補償方略」の下位カテゴリは「意味明確化」「コントロール」であり、「内容理解方略」の下位カテゴリは「要点把握」「記憶」「質問生成」であり、「理解深化方略」の下位カテゴリは「構造注目」「既有知識活用」である。

さらに、3つの方略因子は、「理解の深さという観点から解釈できる」(犬塚, 2013) のであり、並列な関係にあるのではなく、最も基礎的なレベルの方略として「理解補償方略」があり、その上に「内容理解方略」、さらにその上に「理解深化方略」が積み重ねられ、それぞれの方略が使用されるという段階性があることを指摘している(犬塚, 2002;2013)。

4.2.3. 分析1:読解方略による分類

戯曲読解アンケートのQ3は、「戯曲読解を困難にさせている要因」を問うものである。その回答に対して、分析1を行った。まず、133人の回答文から463に及ぶ関連語句(以下、標本)を抜き出し、それらに対して言い換えを施し、27項目にまとめた。次に、27項目のそれぞれに対して、読解方略の7カテゴリのうちから関連が深いと考えられるものを重複を許して当てはめた。便宜上、「意味明確化」をA1、「コントロール」をA2、「要点把握」をB1、「質問生成」をB2、「構造注目」をC1、「既有知識活用」をC2とし、7カテゴリのいずれとも関連しないと考えられる項目にはDを付した。なお、「記憶」は戯曲を読解する上で妥当な方略とは言えず、標本数も0であったことから除外した。結果を表2-1に示す。続いて、A1からDの7項目に標本数を対応させた結果を表2-2に示す。

表2-1 戯曲読解アンケートQ3 「言い換え名称」と読解方略7カテゴリの関連

読解方略の7カテゴリ	No.	言い換え名称
A1	1	語彙力の不足
A1	2	知識の不足
A1 A2 C2	3	読書量の不足
A1 A2 C1	4	戯曲を読み慣れていない
A1 A2 B1	5	字面(書かれている文字)を追うだけ
A1	6	言葉の意味がわからない
A2	7	読む回数不足
A2	8	時間の不足(時間をかけない)
A2	9	集中力の不足
A2	10	根気の不足(飽きる)
A2	11	雑な読み方
A2 B1 C1	12	整合性がとれない(場面や人物がごちゃごちゃになる)
B2	13	自分よがりな読み方
B2	14	固定観念(先入観)
B2	15	「わかった」つもり
B2 C2	16	考えない(苦手)
B2 C2	17	「問い」が持てない
B2 C2	18	想像力の不足
C1	19	文法力の不足
C2	20	経験の不足
C2	21	知らないコト(世界、時代)だから
D	22	興味・関心の不足

D	23	読み解く「方法」を知らない(習っていないから)
D	24	面白くない
D	25	読解力の不足
D	26	字を書かない
D C1	27	戯曲を書いたことがない

表2-2 戯曲読解アンケートQ3 読解方略7カテゴリに対応した全学年標本数

理解補償方略		内容理解方略		理解深化方略		その他
意味明確化 A1	コントロール A2	要点把握 B1	質問生成 B2	構造注目 C1	既有知識活用 C2	その他 D
109	122	36	76	26	68	26

図2は、表2-2を円グラフに変換し、A1からDの7項目における標本数の比率を明示したものである。比率は、A1が23.5%、A2が26.4%、B1が7.8%、B2が16.4%、C1が5.6%、C2が14.7%、Dが5.6%であり、A群が49.9%、B群が24.2%、C群が20.3%であった。明らかな結果のひとつは、「戯曲読解を困難にさせている要因」として挙げられた項目の半数が「理解補償方略」に関連するものであることと、それを「意味明確化」と「コントロール」が二分していることである。つまり、戯曲読解を困難にさせている最大の要因は、読解者にとって難しい言葉や文を逐次的に理解していくことが何らかの理由でできないということなのである。また、この結果は、戯曲であっても、説明文などの文章の場合と同様に、「理解補償方略」が読解の基礎を成すものであることを示唆している。

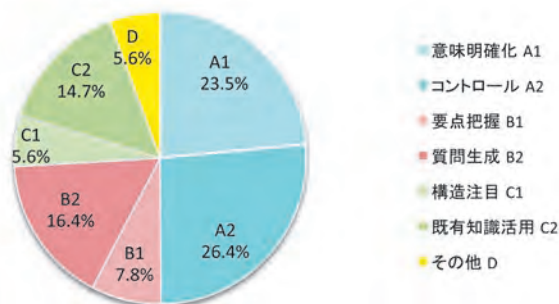


図2 戯曲読解アンケートQ3 読解方略7カテゴリにおける標本数の比率

図3は、A1からDの7項目それぞれについて、標本数を学年別で並べた棒グラフである。学年によって戯曲読解を困難にさせている要因に違いがあることが読み取れる。例えば、A1「意味明確化」は学年が上がるごとに数値が低くなっている。さらに、A2「コントロール」では3回生を、B1「要点把握」では2回生を除けば、学年が上がるごとに減少傾向を示している。「コントロール」で3回生が、「要点把握」で2回生が抜き出ている理由としては、調査の1~2ヶ月前に体験した公演実習の内容が大きく影響しているのではないかと考える。公演実習で取り上げる戯曲は各学年の課題や目標によって選択されている⁽⁶⁾。そのように選択された戯曲に対して、3回生では「コントロール」に、2回生では「要点把握」に、多くの学生が困難を感じたのであろうと推測する。また、1回生と4回生を比較した場合、同学年内において、1回生では基礎的方略であるA群の比率が高いのに対して、4回生ではB2「質問生成」やC2「既有知識活用」というより高次の方略の比率が高くなっている。戯曲の読解においても、説明文などの場合と同様に、方略の段階性が認められると言えるのではないかと推測する。

Dについても一考しておく。Dとは、「(戯曲読解に)興味・関心がない」「(戯曲読解の)方法を知らない・習っていない(と思っている)」などという項目を集めたものである。戯曲読解の方法については、実際、複数の授業で触れているが、そもそも戯曲という形式は多くの学生にとって新しい、不慣れなものはずであり、学生の中には学習動機や意欲が低いまま

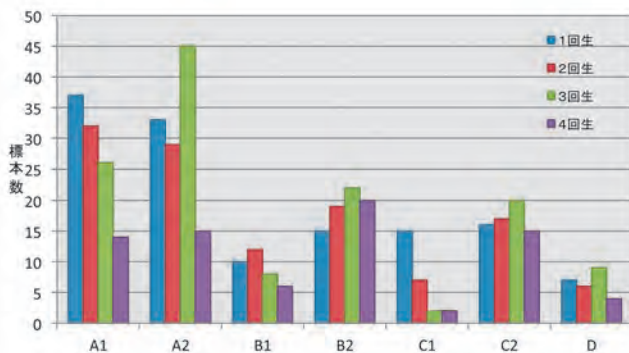


図3 戯曲読解アンケートQ3 読解方略7カテゴリ標本数の学年別比率

で、学習が成立していないと感じている者がいることは推察できる。学習動機や意欲が低いというのは、通常の読解方略を用いる以前の様態と言えよう。しかしながら、戯曲の読解においては、基礎的な方略のひとつとして「動機・意欲」というカテゴリを加える必要性を指摘しておく。

4.2.4. 日本語力の現状

大学生の日本語力が低下していること⁽⁷⁾が社会的な問題として語られるようになってから十数年以上も経つ。その原因として、「ゆとり教育の弊害である」「読書時間の減少⁽⁸⁾」「学力試験を課さないAO入試や推薦入試が増加したため」など、様々な要因が語られている。現在、高等教育機関である大学の授業を十分理解できるだけの日本語力を備えた学生が果たしてどの位の割合で在籍しているかは不明である。このような社会状況から考えれば、本学の演技演出コースの学生も例外ではないはずだ。図4は、日本語力調査において新1回生から新4回生までの155名が、どの設問を誤答したかをグラフ化したものである。

Q4は出題語が文中でどのように使われるのかを問う「用法」問題である。出題語は「いたわる」で、4つの文での使われ方を比較し最もよいものを選ぶのだが、70名(45.2%)の学

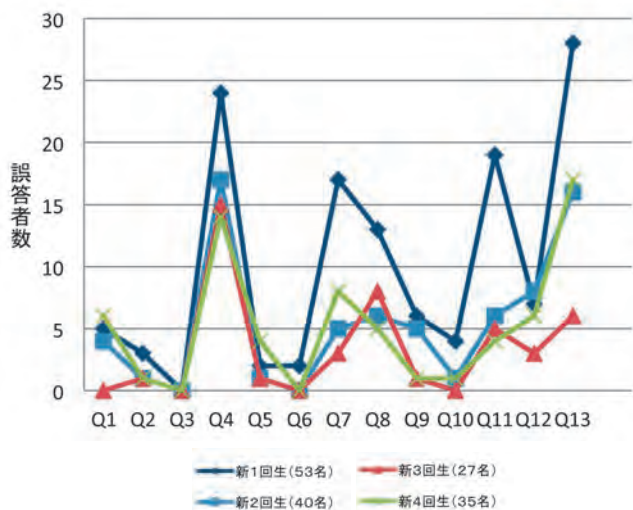


図4 日本語力調査 設問別の誤答者数

生が誤答している⁽⁹⁾。Q13は広告やパンフレット、情報誌、ビジネス文章などの情報素材の中から、必要な情報を探し出すことができるかを問う「情報検索」問題である。設問では、外国人留学生の出身国・所属・学年が提示され、募集中の奨学金リストの中から該当学生が応募できる奨学金の数を答えるもので、誤答者は67名(43.2%)。この2問では約4割強の学生につまずきが見られた。以下、Q11は34名(21.9%)、Q7は33名(21.3%)、Q8は32名(20.6%)と約2割が読解問題でつまずいている⁽¹⁰⁾。

今回の日本語力調査の結果、本学の演技演出コースの学生も他大学の学生同様の「日本語力の低下」の傾向があることが判明した。すなわち、犬塚(2013)による「理解補償方略」の「意味明確化」「コントロール」部分に課題があるということだ。学生らがこの部分につまずきがあるならば、一般的文章の「読解」はもとより、①正確に内容を理解し、②演技や演出のための材料を抽出する「戯曲読解」の作業過程に困難を感じ続けているのは自明のことであろう。

4.3. 「戯曲読解」の3カテゴリ

4.3.1. PISA型読解

「戯曲読解」について考察するとき、参考にするべき国際的調査がある。OECD(経済協力開発機構)による国際的な生徒の学習到達度調査(Program for International Student Assessment), 略称PISA(ピザ)調査である。PISA調査では15歳児を対象に、読解力、数学的リテラシー、科学的リテラシーの3分野について、2000年より3年ごとに本調査を実施してきた⁽¹¹⁾。

このPISA調査における「読解力」は、従来日本で言われてきた「読解力」とは異なる。従来日本の「読解力」とは、主として文章の内容や登場人物の心情などを正確に理解する能力のことであった。一方、PISA調査の「読解力」は、「自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、効果的に社会に参加するために、書かれたテキストを理解し、利用し、熟考する能力」と定義されている。有本(2008)⁽¹²⁾によれば、PISA調査の「読解」とは、「論理的に読んで、読んだことにつ

いて自分で考えて、読んだことを根拠にして自分の意見を表現すること」であり、「『読解力』というより『読解表現力』」と呼ぶにふさわしい。つまり、「PISA型読解」とは、「①正確に読んで、②読んだことを根拠にして、③自分の意見を表現すること(有本, 2008), という作業過程のこと」だと言えよう。

そして、このような「PISA型読解」のあり方は、そのまま「戯曲読解」のあり方でもある。なぜなら、演技や演出を前提にした戯曲の読解は「従来日本の読解」には収まらない、「表現」こそを視野に入れた作業だからである。

4.3.2. 分析2:「理解」と「表現」と「表現準備的理解」

戯曲読解アンケートのQ2は、「戯曲読解の作業を構成する要素」を問うものである。つまり、どのようなことを理解したり、できるようになると、「戯曲読解」が達成されたと考えるのかについて質問した。その回答に対して、分析2を行った。まず、133人の回答文から313に及ぶ関連語句(以下、標本)を抜き出し、それらに対して言い換えを施し、28項目にまとめた。小説などの物語を描いた文、ましてや説明文などでは意図されないような観点が多数挙げられた。それらは、概ね演じたり演出することを前提にしている。登場人物を「役」と呼び、役をどのように造形するかという観点も多く見られた。「役の行動を理解する」「せりふの発話の理由を理解する」「役の目的を理解する」というのは、その例である。さらに、「演じることが出来る」や「理解したことを他者に説明できる」という状態に至ることを挙げた学生もいた。これらは「理解」ではなく「表現」と呼ぶべきものである。一方、演技や演出、中でも役を造形するという作業を前提にした理解の段階を目指すというのは、「表現準備的理解」とでも呼ぶべきものであろう。

そこで、次に、28項目を「理解」「表現」「表現準備的理解」という3つのカテゴリに分類した。これらのカテゴリは、本論文における「戯曲読解」の定義である「①正確に内容を理解し、②演技や演出のための材料を抽出し、③演技や演出をする、という作業過程のこと」の3過程に対応している。つまり、「理解」は正確に内容を理解することに関連したカテゴリであり、「表現」は演技や演出をすることに関連したカテゴリであり、

「表現準備的理解」は演技や演出のための材料を抽出することに関連したカテゴリである。便宜上、「理解」をU、「表現」をE、「表現準備的理解」をU(E)とした。全28項目のうち、9項目をUに、3項目をEに、16項目をU(E)に分類した(表3)。

表3 戯曲読解アンケートQ2
「言い換え名称」の戯曲読解3カテゴリへの分類

カテゴリ	No.	言い換え名称
理解 U	1	あらすじの理解
	2	物語の理解
	3	作者の意図・作品のテーマの理解
	4	言葉(単語)の意味の理解
	5	読解ができています
	6	(自分なりの)解釈ができています
	7	「正しい」理解
	8	「矛盾」がない状態
	9	「疑問」がない状態
表現準備的理解 U(E)	10	(調べてある)時代背景の理解
	11	サブテキスト(書かれていないこと)の理解
	12	セリフの発話の理由がわかる
	13	役の感情(心情, 思い)の理解
	14	役の行動の理解
	15	役の目的の理解
	16	役同士の間関係の理解
	17	「なにがおきているか、出来事」の理解
	18	「事実」と「解釈」の区別ができています
	19	「情報」を抽出できています
	20	多角的な視点を持っている(使える)
	21	(根拠は不明だが)「想像」「イメージ」をできる
	22	役・物語に共感できる
	23	セリフの読み方(言い方)がわかっている
	24	役の思考の理解
25	演出の視点	
表現 E	26	他者に話して説明ができる状態
	27	「演じる」ことができる
	28	(表現する時に)役として道筋を立てる

図5は、表3を円グラフに変換し、U、E、U(E)の3カテゴリにおける標本数の比率を明示したものである。

比率は、Uが37.4%、Eが11.8%、U(E)が50.8%であった。「戯曲読解の作業を構成する要素」として挙げられた項目の半数

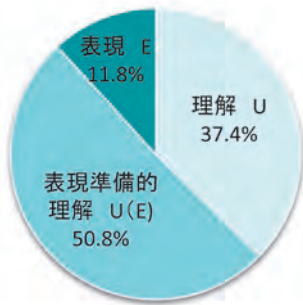


図5 戯曲読解アンケートQ2 戯曲読解3カテゴリにおける比率

が「表現準備的理解」に関連している。学生らが戯曲の読解という作業のうちで重要視していることは、演技や演出という表現にいかに関わりつるかということであると言えよう。また、このことは、説明文や小説などの読解の場合とは大きく異なる点でもあろう。

図6は、標本数を28項目ごとに並べた棒グラフである。

U群においては、「内容」「あらすじ」「物語」「作者の意図」「作品のテーマ」というものへの理解についての割合が特に高い。また、U(E)群においては、「役の行動」「役の内面」「サブテキスト(書かれていないこと)」「物語の時代背景」「せりふの発話理由」というものへの理解についての割合が特に高く、他に「多角的な視点が持てる、使える」というのも比較的高かった。演じたり演出したりする際には、演技や演出プランなどにおいて、できるだけ多くの選択肢を持つておく必要がある。

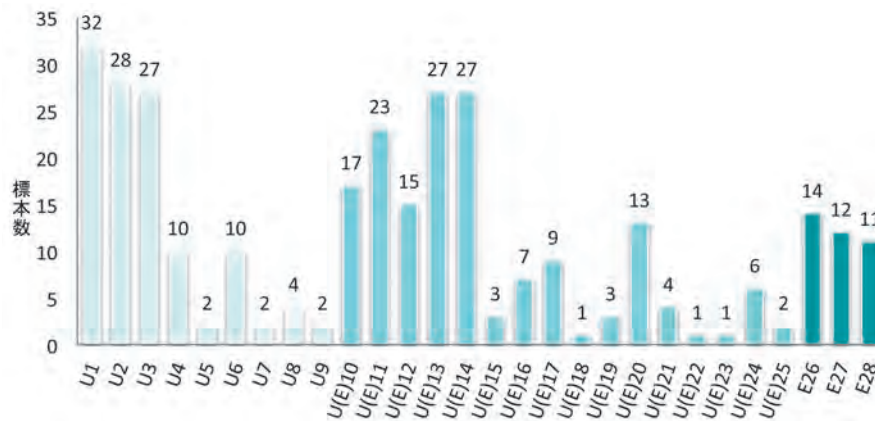


図6 戯曲読解アンケートQ2 「言い換え名称」28項目ごとの標本数

「多角的な視点を持つ」とは、そのようなときに、できるだけ多くの選択肢を持つておくことを意味している。

5. 提言

5.1. 日本語力の涵養を目指す

芸術家であっても、日本語の力・ことばの力が十分備わっていることが肝要である。創作の過程では、自らの創造性や想像性を発揮するとき、思考を生み出し、創造計画を立て、関わりのある他者と交流するといった過程を経て作品を創り上げていく。そして、この過程から「ことば」を取り除くことは不可能である。特に、演劇創作では「ことば」の集積体である戯曲を用い、戯曲を読み解かなければならない。ならば、まず第一に日本語力を改善するべきであろう。筆者らは現在、担当科目である1回生必須科目「演技基礎演習」において、日本語の「基礎力」涵養をテーマにその一部を刷新した授業に着手したところである。

5.2. 読解方略に着目した指導

読解について学生に指導するとき、「読解方略」という観点を持って指導をすることは有効である。犬塚(2013)⁽¹³⁾によれば、「National Reading Panel(2000)⁽¹⁴⁾は、文章理解の指導

に関する研究をまとめ、(中略) 方略指導においては、読解目的や場面に適した方略の組み合わせを明示的に指導し、適切な使い方を指導することが有効であることも指摘されている」とある。つまり、「戯曲読解」においても、数種類の読解方略を考案し、学生に「戯曲読解」について指導する際には、それらの読解方略を時には個別に、時には組み合わせ、さらには段階性を考慮して指導することが可能であるし、有効なのだと思える。

その場合、「戯曲読解」の基底をなす読解方略とは、おそらく、説明文などの場合と同様に「理解補償方略」であろう。そして、分析2で示した「理解」と「表現準備的理解」の多くは、「内容理解方略」と、その上位にある「理解深化方略」を加えることで、ある程度までは達成できるであろう。

だが、「戯曲読解」においては、これらの方略だけでは充分とは言えない。戯曲の読解における作業は、説明文などの読解の場合と比較して、より多岐にわたるからである。何より表現を前提とし、目指し、達成するという含む「戯曲読解」においては、「表現準備的理解」を促進させるような読解方略の指導を、さまざまな工夫をしながら実践していくことが必要であろう。筆者らは現在、そのような方略を含んだ「戯曲読解方略」とでも言うべき体系を構想し、その指導を実践中である。

6. おわりに

本研究では、戯曲読解アンケートにより、本学の演技演出コースの学生たちが「戯曲読解に困難を感じ続けている」という実態を明らかにし、同時に、「戯曲読解を困難にさせている要因」について手がかりを得た。さらに、日本語力調査により、学生たちに「日本語力の低下」の傾向があることが判明し、戯曲読解を困難にさせている最大の要因として推察するに至った。また、同アンケートの回答から「戯曲読解の作業を構成する要素」について考察し、「理解」「表現準備的理解」「表現」という3カテゴリを考案した。そして、戯曲の読解や演技の教育において、日本語力の涵養と読解方略に着目した指

導法を実践することが有効であるとの提言をした。

しかしながら、学生たちの日本語力やその日本語力と戯曲読解能力の関連性については、継続的であり厳密な調査研究を実施し、その結果のもとに、今後も論じる必要があるだろう。また、日本語力の涵養についての具体策と戯曲読解の方略指導については、筆者らが現在実践中であるために、今回は詳細などを論じることをしなかった。それらについて論じるためには今後の機会を得なければならない。

註

- (1) 2017年3月に発行された『演劇実践系大学連携による俳優育成のシステム構築のための調査事業記録集』(東京演劇大学連盟主催、文化庁委託事業「平成28年度次代の文化を創造する新進芸術家育成事業」)にも、戯曲読解に関する記述はいくつもあるが、その指導法に関してはほとんど言及されていない。
- (2) 国際交流基金・日本国際教育支援協会主催。
- (3) 主催者の許諾を得た上で、日本語能力試験問題例N1 <http://www.jlpt.jp/samples/n1/index.html> を利用。
- (4) 担当教員による戯曲の選出と演出によって作品創造を行うもので、「学内公演」として年1回学内施設において発表する。
- (5) 犬塚美輪(2002)説明文における読解方略の構造 教育心理学研究, 50, 152-162. 犬塚美輪(2013)読解方略の指導 教育心理学年報, 52, 162-172
- (6) 2016年度の公演実習の演目は、1回生が谷川俊太郎作「どんとどん」、2回生が清水邦夫作「鴉よ、おれたちは弾をこめる」、3回生が宮本研作「ブルーストッキングの女たち」および「美しきものの伝説」である。
- (7) 高松正毅(2006)日本人大学生への日本語教育 日本語変革への構想 高崎経済大学論集 48, 213-222
- (8) 全国大学生生活協同組合連合会(2017)『第52回学生生活実態調査の概要報告』によると、大学生の約5割が1日の読書量がゼロであった。<http://www.univcoop.or.jp/press/life/report.html>
- (9) 今回の調査対象者以外にも卒業生数名に同様の日本語力調査を行ったが、「いたわる」は正解者が少なかった。これは、若者世代の「語彙」では仲間内の身の回りのことばや「新語」には詳しいが、書物やニュースで意識しないと目にしない幅広い「ことば」は知らないという背景があるかもしれない。朝日新聞社×Benesse(2016)『第1回現代人の語彙に関する調査 結果速報』

- (10) 今回の日本語力調査では、新1回生53名中正解が10問以下の学生が25名、約半数近くの学生が3問以上誤答していた。しかし、本論文では学年間の平均点の比較検討は取り上げず、別の機会に改めて検討したい。
- (11) 文部科学省 国立教育政策研究所 (2016) OECD 生徒の学習到達度調査 2015年調査国際結果の要約
- (12) 有本秀文 (2008) 必ず「PISA型読解力」が育つ七つの授業改革 明治図書
- (13) 犬塚美輪 (2013) 読解方略の指導 教育心理学年報, 52, 162-172
- (14) National Reading Panel (2000) Teaching children to read : *An evidence-based assessment of the scientific research literature on reading and its implications for reading instruction*. Bethesda, MD : National Institute of Child Health and Human Development.